

共同被告同志に告ぐる書

市ヶ谷刑務所に於て 佐野学 鍋山貞親

我々は獄中に幽居すること茲に四年、その置かれた条件の下において全力的に闘争を続けると共に、幾多の不便と危険とを冒し、外部の一般情勢に注目してきたが、最近、日本民族の運命と労働階級のそれとの関連、また日本プロレタリア前衛とコミンターンとの関係について深く考ふる所があり、長い沈思の末、我々に従来の主張と行動とにおける重要な変更を決意するに至つた。

日本はいま、外、未曾有の困難に面し、内、空前の大変革に迫られて居る。戦争と内政叩改革とをばらむ此内外情勢に対し、あらゆる階級と党派とは課題解決の準備と対策に忙しい。此時、労働階級の前衛を以て任ずる日本共産党が幾多の欠陥を露呈して居る。党の基礎は現実的にも可能的にも著しく拡大したが、党員の社会的構成も党機構も行動も宛(さ)ながら急進小ブルジョアの政治機関化して居る。党は近年の恐慌及びそれに関連して暴露された資本主義機構の腐敗に対する大衆の憤激を指導し得なかつた。満洲事変及びそれに引続く一連の戦争情勢に対する党の公式的対策は完全に破綻し、党の反戦闘争は支那新聞のデマ記事やコミンターンのアヂ文書に於てのみ華やかであつたにとどまる。重要なストライキの指導も深刻化しゆく農民闘争の権威ある指導も、党に依つて行はれなかつた。かつて或時代の日本共産党は武装デモの呼びかけをなし、事実、小規模乍らそれを組織した。それは決定的に誤謬であつたが、それでもなほ此誤謬は大衆の支持を確信し大衆の中に突入する思想を現はして居る。それに比べて昨年来の諸事実はブランキズムの悪い要素のみの寄せ集めの観があり、プロレタリアートと全然縁なき腐敗傾向すら示した。党は客観的に見て労働階級の党であると言へない。我々は大体のことは獄中から沈黙して居るべきである。又、我々は個々の党員諸君がまじめで勇敢に働いてゐること、闘争が極めて苦しく且つ深刻なものとなつて居ること、一般的諸条件が有利に緊張してゐること等を十分知つて居る。しかも党として、組織として、全体として、プロレタリア前衛の結合隊 [ママ] として正しい発展をしてゐると諸君は断言し得るだらうか。社会の生産機構に直接参加しない小ブルジョアの尖瑞分子たるインテリ層が、労働階級を踏台として其意欲を発散せんとしたのは従来とても度々有つたけれども、彼等は今や連続せる弾圧のために生じた共産党の弱さと間隙とに乗じて之に入り、労働階級中の進歩分子たる前衛をも踏台にせんとして居る。もとより個々の同志は夢にもそんな大それたことは考へまいが、階級が個々人の意思から独立して決定された自己の目的を追求することは小ブルジョアとても同じである。此故に弾圧に屈せざる真摯な同志の勇氣と熱情に拘らず、党自身の方向がゆがみ、ジャーナリズムの喝采を受けても肝腎の労働者大衆の関心から離れ、欠くべからざるプロレタリア的自己批判は抛擲され、純真の青年同志や労働者党員は大衆的闘争の中に訓練せられない。我々はこの現情に大なる遺憾なきを得ない。勿論かゝる事態は最近時の党指導者の個人的資性や能力にその本来的原因が有るのでない。彼等の多くが所与の条件の下に於て最

も誠実優秀の人物であつたことを十分信ずる。それにも拘らず党がプロレタリア前衛の結合たり得ないことが根本問題なのだ。我々は熟考の末、かゝる事態を必然ならしめた根本原因の一つは、我々が無限の信頼を寄せてゐたコミンタールの政治及び組織原則そのものの中にあるを悟つた。

我々は従来最高の権威ありとしてゐたコミンタール自身を批判にのぼせる必要をみとめる。我々はコミンタールが近年著しくセクト化官僚化し、余りに甚しく蘇連邦一国の機関化し、二十一ヶ条加盟条件の厳格なプロレタリア前衛結合の精神を失ひ、各国の小ブルジョアに迎合し、悪扇動的傾向すら生じたと断定する。彼は日本の党に関し、気骨ある労働者よりも筆舌の饒舌的小ブルジョアを歓迎し、希望と状勢とを混同して放恣なる戦術を考案し、目に見えたウソを以て無責任な煽動をやつて居る。一九二六年より其翌年に亘り、日本共産党の陣営内に最初の小ブルジョアの氾濫の現象があつたとき、コミンタールは峻烈に之を批判し、党内の優秀な労働者党员と共に此偏曲を克服した。然るに現在、小ブルジョア要素があつた当時と比較にならぬほど圧倒的優勢を党内に占め、有形無形の損害を日本の左翼的労働者運動に加へつつあるに拘らず、コミンタールは一言半句もかゝる偏曲に触れず、却て齒の浮くような文句を以て党を賞揚して居る。近年の世界恐慌及び其後の尖鋭化した諸情勢に対するコミンタールの理論的批判は常に深刻鋭利、人を傾聴せしめるが、コミンタールはこの情勢中において国際的革命組織として諸国労働者の現実闘争を指導するには甚だ無能力であることを暴露した。各国の労働者はコミンタール及び其支部と殆ど無関係に自国の資本主義と戦つて居る。コミンタール支部は世界にあまねしと雖も其実勢は揚言の如く発展して居ない。端的な例をひく。コミンタールの大党たるドイツ共産党がヒットラーの反動の前に何等抵抗をなし得ざりしは如何。現に革命渦中にあること既に二年なるスペインの党の弱さと、それに対するコミンタールの叱責的批判だけをくり返す無責任は如何。支那共産党はソヴェート地域の大衆運動を基礎とするが故に強いのであつて、コミンタール支部たるが故に然るのでない。むしろコミンタール支部たるが故に同党は時々セクト的暗影をもつのである。国際的カムパもお座なりだけのものである。(国際失反闘争、反戦デー等。) コミンタール大会は既に五年に亘つて開かれない。党と組合とを問はず、大会を無視するは其指導組織の官僚化したことを意味する。コミンタールは各国に擡頭せる国民主義的傾向に対してはたゞ之を排外主義とけなしつけるだけで、其中に動く生きた力を科学的に解剖するのを敬遠して居る。蘇連邦の異常な発達と国際的危機情勢が必然にコミンタールをして蘇連邦の国策遂行機関たる傾向を帯びさせたのは諒とするが、近時、其傾向極端となり、蘇連邦擁護の一語を各国共産党の最高無二のスローガンたらしめ、各国労働階級の利益をもこれが犠牲たらしむるを要求してゐるのは、世界的労働者運動の発展にとつて決して正しいことでない。事実上、日本共産党は我が労働階級の解放を目ざす党たるよりも、日本における蘇連邦防衛隊又はその輿論機関たることにヨリ多くの意義がおかれてゐるかに見える。コミンタールが日本共産党の現情に何等の批判を加

へず、却て無音任に扇動するは、この意味なしとしない。我々は元より蘇連邦及び支那ソヴェート政府との結合を我が労働階級の重要任務の一と主張するけれども、それは飽くまで自主的立場においての任務でなければならぬ。今日、日本共産党が、既に内面的に変化せるコミンターンの決議に事々に無条件服従を求められ、日本の労働階級の創意の奔放を妨げて居るのは、我が労働者運動の一大不幸となつた。我々は過去十一年間、忠実に一切の苦樂をコミンターンに托してきたが、今一切の非難を甘受する決意を以て、本声明書に述ぶる諸理由に基き、日本の左翼的労働者運動が、党と言はず、組合と言はず、コミンターンの諸関係から断然分離し、迫り来る社会的変化に適応すべく、新たなる基準に於てラヂカルに再編制せられねばならぬことを主張する。

コミンターンが日本の特殊性を根柢的に研究せず、ヨウロッパの階級闘争の経験殊にロシア革命の経験にあてはめて日本の現実を引きずつて行く傾向は、我々の夙に指摘して居た所であるが、昨年五月発表の日本問題新テーゼはかかる傾向の頂点を示して居る。その著しき方法論的誤謬の二三を示す。同テーゼの冒頭は、日本資本主義の「特殊に攻撃的な強盜性」なるものに対する自由主義的憤激を以て始まつて居る。資本主義は比喩的に言つてどこでも「強盜的」だつた。歴史はイギリス、フランス、アメリカ、前代ロシアのは紳士的だつたが、自本のは強盜的だつたなどと教へて居ない。問題は、十九世紀後半に日本が他国の植民地とならず、自ら資本主義国として発展したことが当時の事情の下において莫大な革命的意義を有したことにある。それは欧米資本の重圧に呻吟するアジア諸民族の覚醒と革命的闘争を早め、以て世界史の進歩の有利な条件を創造した。この歴史的必然、この世界史的意義をヌキにして日本資本主義の全発達過程をたゞ強盜と罵つてみても何等科学的なものはない。これは蘇連邦リトヴィノフ外交が日本及び支那に関して国際連盟のブルジョア諸国と一致するに似て、コミンターンの指導者も亦満洲事変以後の日本に対してヨウロッパの自由主義者と同じ興奮に駆られてゐるのを示すものであるか。更にこのテーゼは日本において君主制反対の大衆闘争が渦巻いてゐるとか反戦的大衆運動が激化してゐるといふ、支那及歐洲で捏造された虚構の事実を基礎として全部のテーゼを引出してゐる。主観的希望を以て客観的事実をゆがめ之を戦術の基準とするが如きは、革命家として恥づべきことであり、このテーゼの作者は詩人であつても、プロレタリア的戦術家でない。

最近の世界的事実（蘇連邦の社会主義をも含んで）は我々に教へる。世界社会主義の実現は、形式的国際主義に抛らず、各国特殊の条件に即し、其民族の精力を代表する労働階級の精進する一国的社会主義建設の道を通ずることを。民族と階級とを反撥させるコミンターンの政治原則は、民族的統一の強固を社会的特質とする日本において特に不通の抽象である。最も進歩的な階級が民族の発展を代表する過程は特に日本に於てよく行はれよう。世界革命の達成のために自国を犠牲にするも恐れざるはコミンターン的国際主義の極致であり、我々も亦実に之を奉じてゐた。しかし我々は今、日本の優秀なる諸条件を覚醒した

が故に、日本革命を何者の犠牲にも供しない決心をした。我々は世界プロレタリアートの間の国際主義そのものを否定するのではない。しかし今後のより高い国際主義はむしろ世界の主要個所における一国的社会主義建設の努力の中に築かれるであらう。世界すべての民族がかゝる能力を現有してゐるのでないが、日本は現在到達してゐる高度の文化から見て此能力を豊富に有してゐる。従来ブルジョアが彼等の防衛のために恣に日本を使つたが故に、階級意識ある労働者は却て自国に対する大なる関心を欠くようになってゐる。しかし日本の労働者が日本を主として考慮するほど自然且つ必要なことはない。日本民族が古代より現代に至るまで、人類社会の発達段階を順当に充實的に且つ外敵による中断なしに経過してきたことは、我々の民族の異常に強い内的発展力を証明してゐる。また日本民族が一度たりとも他民族の奴隷たりし経験なく、終始、独立不羈の生活をしてきたことの意義は甚だ大きいのである。之によつて培はれた異常に強固な民族的親和統一と国家秩序的経験とは、内面的に相連関して、日本の歴史上に生起した数次の階級勢力交替の過程を、他の、異民族的支配と経済的搾取と政治的圧伏とが錯綜せる国々に見られる如き、階級闘争の原始的な、絶望的な、惨烈的な過程とは著しく異らしめて居る。この歴史的に蓄積された経験は、今日の発達した文化と相保ち、新時代の代表階級たる労働階級が社会主義への道を日本的に、独創的に、個性的に、且つ極めて秩序的に開拓するを可能ならしめるであらう。民族的範疇の無視を以て階級に忠実なる条件と空想するのは小ブルジョアの思考である。日本民族の強固な統一性が日本における社会主義を優秀づける最大条件の一つであるのを把握できないものは革命家でない。民族とは多数者即ち勤労者に外ならない。我々は我が労働階級及び一般に勤労人民大衆の創造的能力に強い信念をもつ。

日本共産党はコミンタールの指示に従つて君主制度止のスローガンをかゝげた。前記テーゼの主旨の一は、更に一步を進め、反君主闘争が現下の階級闘争の主要任務であるなどのバカげた規定をしたことにある。コミンタールは日本の君主制を完全にロシアのツァーリズムと同視し、それに対して行つた闘争をそのまま日本支部に課して居る。日本共産党におけるこのカムパは最近益々極端に赴いて居る。(恐らくコミンタール指導者をも満足させすぎるほどに。) 党は政治的スローガンとしては「天皇制打倒」を恰も念仏の如く反覆し、あらゆる場合に於ては、浅薄な呪詛の言葉をヤタラに振りまいて居る。資本家地主政権といふ階級的言葉すら最近の党機関紙には見当らない。労働者の階級闘争をかゝる一題目に単純化して以て能事了れりとしてゐるのは極めて政治的無能であるか、極めて具体的に何もして居らぬかである。党のかゝるカムパは急進小ブルジョアの間上空疎且つ観念的な自由主義的興奮を喚起すると同時に、他方、労働者の生活——気持には、ます／＼近づき難い状態に自らを置いて居る。我々は日本共産党がコミンタールの指示に従ひ、外観だけ革命的にして実質上有害な君主制廃止のスローガンをかゝげたのは根本的な誤謬であつたことをみとめる。それは君主を防身の楯とするブルジョア及び地主を喜ばせた代りに、大衆をどしどし党から引離した。日本の皇室の連綿たる歴史的存続は、日本民族の過去にお

ける独立不羈の順当的發展——世界に類例少きそれを事物的に表現するものであつて、皇室を民族的統一の中心と感ずる社会的感情が勤労者大衆の胸底にある。我々はこの事実を有りの儘に把握する必要がある。更に日本の君主制が旧ロシアのツァール、旧ドイツのカイゼル等と異なり、明治維新以来、進歩の先頭に立つた事實は、ブルジョアジーの間でもプロレタリアートの間でも、反君主闘争を現実的問題たらしめなかつた。多数の犠牲者を出した幸徳事件はブルジョア自由主義者のセクト的テロリズムとして記憶されるだけであつて、少しも労働階級の革命的伝統の一部を形成して居らぬ。急進的小ブルジョアは其本質上、単純な反君主制コースに昂奮し易い。現在の共産党が殆んどアナキズムと見分けのつかぬ反君主団体の観を呈してゐるのは之等の要素が氾濫してゐるからである。しかしながら労働階級はその階級的生活から資本主義機構の変革を本能的に欲求するけれども、単純な、自由主義的な又はロシアの反ツァーリズムそのまゝの君主打倒論にくみするものでない。

コミンターンが反君主闘争と共に日本共産党に課して居る今一つの大きい課程は戦争反対特に敗戦主義である。我々はこゝにも深酷な小ブルジョア性を見る。元来、因循卑怯な平和主義を愛する小ブルジョアは、現在、之を適当に表現する手段をもたぬため、その尖端たる急進的小ブルジョアはコミンターンの戦争絶対反対論に何の批判もなしに引付けられる。戦争に一般的に反対する小ブルジョア的非戦論や平和主義は我々のとるべき態度でない。我々が戦争に参加すると反対するとは、其戦争が進歩的たると否とによつて決定される。支那国民党軍閥に対する戦争は客観的にはむしろ進歩的意義をもつて居る。また現在の国際情勢の下において米国と戦ふ場合、それは双互の帝国主義戦争から日本側の国民的解放戦争に急速に転化し得る。更に太平洋における世界戦争は後進アジアの勤労人民を欧米資本の抑圧から解放する世界史的進歩戦争に転化し得る。我々は蘇連邦及び支那ソヴェート政府に対する戦争は反動戦争として反対する。我々は断じて好戦的主戦論にくみするものでないと雖も、いま不可避なる戦争危機をかく認識し之を国内改革との結合において進歩的なものに転化せしめるこそ、我が労働階級の採るべき唯一の道と信ずる。民族の利害と労働階級の利害とを反撥せしめるのは誤謬である。我々は日本のブルジョアジーが日本を永くアジアの憲兵たらしめ、欧米資本と共同してアジア諸民族を搾取せんとするを排斥する。同時にコミンターンが蘇連邦の目前の利害の見地から日本共産党に向つて無暗矢鱈に敗戦主義を課してゐるのは日本の労働階級にとつて有害であることを力説する。支那軍閥や米国に敗戦する必要はどこにも無い。腐敗の極に達してゐたツァーリズムのロシアに於ては児童走卒も自国の敗戦を希望した。あらゆるロシアの経験を時処と条件を無視して普遍的教義に転化するのはコミンターンの根本的誤謬の一つであるが、今日の日本は当時のロシアに比して遙に健全であり、遙に文化高く、原始的な敗戦主義は決して大衆の胸に訴へ得ない。日本が敗退すればアジアが数十年の後退をすることは目に見えて居る。日本における敗戦主義は日本民族の敗北の希望を意味し得る。我々は大衆が本能的に示す民族意識に忠実であるを要する。労働階級の大衆は排外主義的に昂奮してゐるのでない。

彼等は不可避に迫る戦争には勝たざるべからずと決意し、之を必然に国内改革に結合せんと決意してゐる。之を以て大衆の意識が遅れてゐるからだと片付けるのは大衆を侮辱するのみならず、自ら天に唾きするものだ。

我々はコミンターンが日本共産党に向つて要求する公式的な植民地民族の国家的分離政策が日本において妥当ならざるを指摘する。コミンターンの民族自決の原則は、民族の牢獄と呼ばれたツアーリズムのロシアにおいて、之を認めざれば二十有余の諸民族の叛乱によつてロシア革命そのものの成功を不可能ならしめるものなりし故に成立した原則であり、その内容においてウイルソンの国際連盟的なるブルジョア民主主義性、形式的小国主義性を含んでゐる。それはあらゆる時と所に妥当な原則でなく、プロレタリアートの原則としてもロシア革命当時にもつた革命性を既に失つたもう陳腐となつた原則である。現にロシア革命における民族自決の実践の結果は、反動的ポーランドの成立、バルト海沿岸諸邦の英仏資本の傀儡化等に見る如く、ヴェルサイユ条約の民族自決の実践の結果、中部ヨウロツパに中世的分裂状態が成立したのと同様、悉く反動的効果を収めたのみである。この原則は母国のプロレタリアートと植民地の労働者大衆との結合によつて築かれる大国的な一國社会主義の可能を無視して居る。諸民族の生活の権利に甲乙はない。我々は鮮台両民族に対する資本主義的搾取及び弾圧を何よりも日本民族自身に対する最大の侮辱として排する。我々は日台鮮各民族の完全な同権のために闘ふ。しかし民族同権の具体的表現は形式的な国家的分離でない。経済的文化的歴史的に近接せる諸民族の勤労者大衆が一個の大国家に結合して人民的階級的に融合し社会主義の建設に努力することが遙に現実的な世界史的方向である。緊密の同一経済体系の中に生活する日台鮮勤労者大衆の共同の任務は搾取者との闘争を通じて此の国家を勤労者自身の国家たらしめるにある。もし日台鮮諸民族がコミンターンの希望する如く機械的に民族自決の原則に従ひ国家的分離を行つたならば、それは依然ブルジョアの支配する反動的な小国群の成立に終り、アジア諸民族のより保守的分裂の第一歩となるであらう。ヨウロツパの帝国主義母国とその植民地（たとへばイギリスとインド、フランスと印度支那）は経済的文化的歴史的に懸絶する故に、双互の勤労者と雖も容易に結合し難く、従つて一個の社会主義体系を産出するは殆ど不可能である。日本と朝鮮、台湾はそれらと殆んど範疇的に異つてゐる。我々は日本、朝鮮、台湾のみならず、満洲、支那本部をも含んだ一個の巨大な社会主義国家の成立を将来に予想する。

コミンターンはこれまで多くの輝かしい仕事をしてきたから、当然に勤労者及び弱小民族に魅力をもつて居る。この故にコミンターンを去つた人間にして、その去つた後までも自らコミンターンの支持者であるが如き、不分明な、未練がましい、狡猾な態度をとるものが日本にも外国にも少くない。これらの大衆を欺満する、首鼠両端を持するの徒をコミンターンが常に軽蔑し、辛辣な嘲罵を加へて居るのは尤もなことである。我々はこの嘲罵を招かないために今後鮮明な態度をとるであらう。我々は支那ソヴェート政府や其共産党に活動する同国の同志達がコミンターンのセクト化、官僚化、蘇連邦一國機関化等に関し

て我々と同意見になるのは時期の問題にすぎぬと考へる。コミンターンは恐らく世界戦争勃発と共に尖鋭な瓦解をするであらう。各国の最も積極的なプロレタリアートを含んでゐる共産党では、戦争と革命との相関を現在のコミンターンの如く消極的に理解せずして、戦争への積極的参加を通じて問題を解決せんとする者を多く出すだろう。十一年来コミンターンの旗の下に教養され、全力を以てその陣営のために戦つた我々であつたが、今、相容れざるもの多くをもつに至つたから、潔くこの陣営を去つて新たな道に就く。我々はコミンターンの歴史的意義や革命的業績や方針等について今後と雖も一定の敬意を失ふものでない。

我々は尚資本の搾取に対する労働者の利益擁護（七時間労働其他）や農業革命の諸問題（寄生的土地所有の廃除其他）につき、多く語るべきものを持つて居るが、それらに関しては根本において従来の態度を変更する必要をみとめないから、こゝに省く。又労働階級前衛の指導的役割と其結合の必要についての確信に少しの変りもない。我々はコミンターン日本支部でふ組織が前衛の結合形態であるといふ公式的假定をやめねばならぬ。現に決してそうなつて居らぬ。又なり得ない。我々は日本、朝鮮、台湾、また満洲をも含んでの、プロレタリア前衛の独自の結合隊の可能を信ずる。左翼労働者運動の全領域に過度に入り込んだ小ブルジョア要素及イデオロギーは執拗に掃蕩されねばならぬ。日本の労働階級は他人を搾取せざる小ブルジョア勤労大衆を獲得せずして其役割を果たし得ないけれども、労働階級の主導的地位が確立された後にのみ、小ブルジョア勤労者はその同盟者たり得る。

我々はコミンターンを難じ、党を難じ、急進小ブルジョアを難じた。我々は深い苦しみを感じつつ痛苦的な自己批判として之を認めた。勿論我々はすべての責任をコミンターンや小ブルジョアに転嫁するものでなく、又転嫁し得るものでない。日本共産党が今日、尖鋭に示してゐる欠陥や矛盾に対し我々自身、強い連帯責任が有る。こゝに述べたことは言簡単に過ぎて意を尽さぬものが多い。しかし我々はこの短い言葉を獄外に出すにも甚しく苦勞してゐる。もしできればヨリ詳細の見解を告げたい。しかしこゝに述べたことだけでも不完全乍ら問題の核心を提出し得たと信ずる。公式的理論から我々の見解を反駁するのは他人をまたず我々自身に十分できる。しかし動かし難い現実には日本の左翼労働者運動のラヂカルな再編制を要求して居る。プロレタリア前衛の党の權威は、コミンターンの決議や論文を神聖現して反覆誦することや蘇連邦社会主義の成功の宣伝だけから生れるものでない。權威は内面から、党活動から、奔出し発揚し形成さるべきものである。かゝる創意が如何に欠けてゐることか。コミンターンの原則及び組織そのものが来りつつある日本社会の変革に決定的に不適合であること、これが略十一年を費して実証された問題の核心である。コミンターンの指導に従つて居ればそのうち何とかなるだらうといふ日和見主義を排する。党同志は勿論多くの真摯な党外労働者や支那朝鮮台湾の同志は我々の声明に驚愕し憤慨するかも知れぬ。我々はその憤激する良心的態度に信頼し、根本からの広汎な討

議の実行を望む。我々に対して汚はしき付度をする者があるかも知れぬ。しかし我々が茲に問題を提示したことは経歴短き個々党员の単なる心境変化と全然その出発を異にする。我々も獄中よりかゝる意見を發表する不適當を十分理解して居るが、この上、沈黙して居ることは却て我々の義務に反く。我々の見解は従来のと對蹠的に異なる外觀が有るが、その自由な内的發展に外ならぬ。何人も我々を自由に批判し、或は賛成し、或は叛徒として鞭うつもよろしい。我々は、我々の見解は、我々の口を通して出た日本のプロレタリアートの自覚分子の意見だといふ確信を固守する。我々が労働階級に全身を献ぐる基本態度は過去と同じく少しの変わりもない。たとへこのまゝ獄中に終らうともプロレタリア前衛の誇りを以て死に赴くことも変わりはない。我々は日本の労働者運動に真摯の関心をもつ何人もこゝに提示された問題に嚴肅な注意を向けることを要請する。

『文芸春秋』 八年七月号